

ピアレビューの経験が学生の自己評価に与える影響

Effect of peer-review experience on students' self-evaluation of their report

庄 ゆかり^{*1}, 長登 康^{*2}, 稲垣 知宏^{*2}, 隅谷 孝洋^{*2}, 中村 純^{*2}
Yukari SHO^{*1}, Yasushi Nagato^{*2}, Tomohiro Inagaki^{*2}, Takahiro Sumiya^{*2}, Atsushi Nakamura^{*2}

^{*1} 広島文教女子大学

^{*1}Hiroshima Bunkyo Women's University

^{*2} 広島大学

^{*2}Hiroshima University

Email: ysyoun@h-bunkyo.ac.jp

あらまし：ピアレビューの経験が、大学一年生の自己評価に与える影響を分析した。H25年は、評価の基準（ループリック）なしに作成したレポートについて、ループリックを用いて他者レポート2件及び自己レポートの評価（自己評価1）を行った。H26年は、ループリックを示し作成したレポートを自己評価とともに提出させ、（自己評価2）、その後、同じループリックを用いて他者レポート2件及び自己レポートの再評価（自己評価3）を行った。3件の自己評価を比較したところ、自己評価2より自己評価3の方が高い評価となった。また、自己評価3の評価点分布は、自己評価1と同様の傾向を示した。

キーワード：ピアレビュー、自己評価、ループリック、初年次教育

1. はじめに

我々は、複数学部の大学一年生が履修する教養科目の一単元において、ジレンマ問題についてのレポート作成とそのピアレビューを実施している。このピアレビューは、時間の制約とお互い様効果への対処として⁽¹⁾、同じ時間帯の複数クラス間で完全に匿名のピアレビューを実施するシステムを開発⁽²⁾、評価基準としてループリックを示し、評価を記入したシートをメールで交換するものである。

本研究では、ピアレビューを受けることではなく、ピアレビューをするという経験が自己評価に与える影響について分析するため、ピアレビューの前後に行った自己評価を比較した。学生の中にまだ評価をするための基準が備わっておらず、また相互評価をすることの意義も明確に理解されていない大学一年次前期においては、ピアレビューの実施が必ずしも意図した効果を上げない可能性が示唆されたので、報告する。

2. 方法

2.1 対象

本研究では、平成25年および26年ともに文学部1年生、および理系4学部（医・工・生物生産・理）混合クラスの1年生という2集団の学生のうち、課題を期限までに完遂した学生（表1）の自己評価を対象に分析を行った。

表1 対象人数

	平成25年		平成26年	
	レビュー後	レポート提出時	レポート提出時	レビュー後
文学部	132	129	129	98
理系学部	167	551	551	279

（単位：人）

2.2 平成25年のピアレビュー

4月の授業の課題として提出した小レポートを題材に、レビューシートの交換によるピアレビューを実施した。

ピアレビューは、この授業用に用意したメールアドレスと学生のメールアドレスをランダムに組み合わせた対応テーブルを用意し、レビュー開始時間に合わせて授業用アカウントから評価者へレポートを送信する。学生は評価シート（Excelファイル）とループリックをLMSからダウンロードし、各レポートを評価した後、評価シートを受信したメールに添付して返信する。返信されたメールは、評価者のメールアドレス情報を削除して被評価者へ転送される。この方法により、各学生は自分を含む3人のレポートを7項目により評価した。本研究では、このうち自己評価だけを分析対象とする（自己評価1）。

各評価項目（表2）はループリックに示された基準に従い、ABCのいずれかで評価したのち、その理由を具体的に説明するよう指示した。

表2 評価項目

Q1	最初に明確な立場表明がされているか
Q2	意見と事実は区別して表現されているか
Q3	意見にはその根拠が述べられているか
Q4	反対意見についても考察されているか
Q5	文章の最後は、論旨の振り返りと論証の確認による結論となっているか
Q6	論理が明瞭にたどれるような文章表現になっているか
Q7	特別な理由なしに口語的表現・強調表現等が使用されていないか
Q8	その他（気付きやコメント）

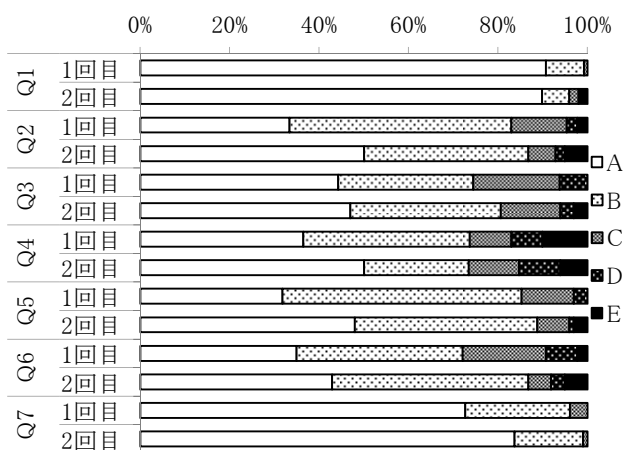


図1 文学部評価割合

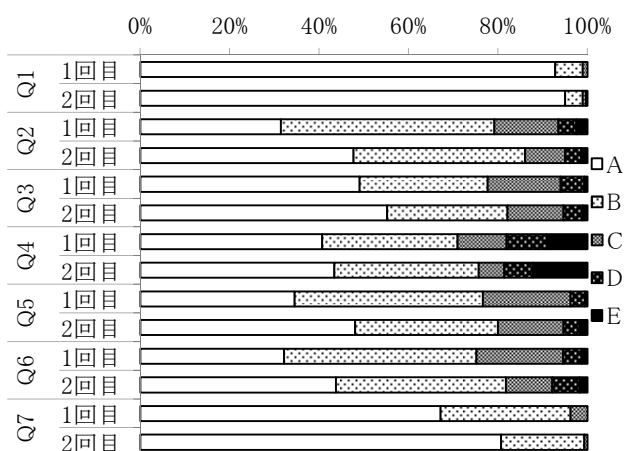


図2 理系学部評価割合

表3 自己評価の比較 (文学部)

	自己評価 1と2		自己評価 1と3		自己評価 2と3	
	p値	p<0.05	p値	p<0.05	p値	p<0.05
Q1	0.017	*	0.056		0.373	
Q2	0.004	*	0.933		0.015	*
Q3	0.109		0.303		0.930	
Q4	0.035	*	0.117		0.114	
Q5	0.006	*	0.156		0.034	*
Q6	0.044	*	0.489		0.489	
Q7	0.041	*	0.253		0.029	*

表4 自己評価の比較 (理系学部)

	自己評価 1と2		自己評価 1と3		自己評価 2と3	
	p値	p<0.05	p値	p<0.05	p値	p<0.05
Q1	0.001	*	0.089		0.107	
Q2	0.000	*	0.180		0.000	*
Q3	0.119		0.421		0.245	
Q4	0.205		0.639		0.663	
Q5	0.000	*	0.068		0.000	*
Q6	0.000	*	0.623		0.001	*
Q7	0.005		0.023	*	0.000	*

2.3 平成26年のピアレビュー

平成25年同様、4月に提出したレポートを題材にした。レポートの課題も同一である。ただし、平成26年はレポート作成時にループリックを示し、レポート提出時にそのレポートの自己評価を合わせて提出させた(自己評価2)。評価項目は平成25年と同一だが、評価指標は細分化しA～Eの5段階としている。平成25年のBは平成26年のB・Cに、25年のCは26年のD・Eに相当する。

ピアレビューの方法は平成25年と同様で、各学生は自分を含む3人のレポートを評価した。この時の自己評価を自己評価3とする。

3. 結果

文学部、理系学部双方とも自己評価3は自己評価2より高い評価となっている(図1, 2)。つまり、ループリックだけを基準に行う自己評価は案外厳しいが、ピアレビューをすると自己評価は甘くなる傾向があることになる。

また、フィッシャーの正確確率検定(有意水準5%)では、自己評価1と自己評価3の評価点分布には理系学部の項目7以外は有意差が認められず、自己評価2の影響は感じられない(表3, 4)。

4. まとめと考察

平成26年の実践に対して、事前に示されたループリックに従いレポートを作成するので自己評価2は高くなり、他者の評価をした後は自らの不足点等に気づくため自己評価3は低くなると予想していたが、逆の結果となった。その理由としては、以下の3つを考えている。

まず、大学1年生前期では、まだ大学での成績評価を受けた経験がない。高校までの評価が主として「相対評価」であれば、ループリックによる評価ではなく、相互の比較により「この程度が良い」としてしまふことが考えられる。また、用意したループリックが適正でないために、判断に迷いが生じている可能性もある。さらに、本実践で行ったのは匿名レビューではあるが、学生には学生同士でレビューをしているのは自明であるから、お互い様効果が生じているのかもしれない。

今後は、より有効な評価指標を作成するとともに、指標に基づいた評価をさせる方法を検討することが課題である。

参考文献

- (1) 藤原康宏, 大西仁, 加藤浩: “公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価”, 日本教育工学会論文誌, Vol. 31, No 2, pp.125-134 (2007)
- (2) 庄ゆかり, 長登康, 稲垣知宏, 隅谷孝洋, 中村純: “ピアレビュー匿名化の影響とメールによるピアレビュー支援システムの開発”, 教育システム情報学会研究報告, vol.28, no.7, pp.15-22 (2014)